幻の郷の人造人間

古木

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

７人の人間がいた。

それらは普通の人間ではなく、それぞれ何かに特化した人間だった。

一人は『正義』を振りかざす剣士。

一人は『慈悲』を与えるシスター。

一人は『希望』を夢みる暗殺者。

一人は『約束』を守り抜く槍術士。

一人は『道標』を示し民を救う王。

一人は『伽藍』に一生を囚われたホムンクルス。

そして、もう一人。
この7人と相対する者。
『憎悪』に燃える復讐者。

この物語は、影ながらに人類を救うホムンクルスの生きざまを描いたものである。

目次

9 69
8 57
7 51
6 44
5 36
4 28
3 18
2 10
1 1

1

7人の人間がいた。
それらは普通の人間ではなく、それぞれ何かに特化した人間だった。
一人は『正義』を振りかざす剣士。
一人は『慈悲』を与えるシスター。
一人は『希望』を夢みる暗殺者。
一人は『約束』を守り抜く槍術士。
一人は『道標』を示し民を救う王。
一人は『伽藍』に一生を囚われたホムンクルス。

そして、もう一人。
この7人と相対する者。
『憎悪』。

『幻の郷の人造人間』

「……それでさ、崎川のやつ泣いたんだってよ！あいつマジヤバくね？」
「な！担任に怒鳴られただけで泣きはじめるとか、男のくせしてたりいな。」

授業中。同じクラスの本と岸野が、大人しい性格の崎川の陰口を叩いている。
よく授業中にそんな大きな声でしゃべれるものだと感心しながら俺は黒板の文字をノートに書き写す。今回のテスト範囲は広いから、手を抜く暇なんてないのだ。

「たりい根性を叩き直す必要があるみたいだし？昼にでもボクシング教室開きますか。もちろん崎川は強制ｗ」
「んじゃリング作ってきますかｗゴムあったら良いけど……　」
「お前レスリングしてぇだけだろがｗ」
「ばれた？ｗｗ」

崎川、めんどくさいことに巻き込まれてるなぁ……と思いつつも、ノートにペンを走らせる。強制されたら行くしかないだろう。命令とはそういうものだ。

八島高等学校1年5組のクラスカーストのなかで、あの二人は頂点。誰も逆らわず逆らう気もないのだ。

しかし、このクラスには異常なやつが4人ほどいた。……5人だったか。数はどうでもいい。

わざわざクラスカーストというものがあるのに、それに逆らう人間がこのクラスにいる。

「……さっきから聴いてりゃクズみてぇな話しかしねぇなそこの二人！」

まず一人目。名前を壁島剛椰（かべじまごうや）。又の名をマックス。

成績優秀、運動神経抜群、心優しい兄貴。この三つがクラスメイトの目から入る情報だ。テスト前にはこいつともう一人で補習教室を開くなんてこともしている。

「いけませんよ、剛椰さん。このお二人には常識というものを親から習わずに成長して

しまった人間なのです。哀れな子羊ですよね」

二人目、清川聖子。名前からして神に仕えてそう。

その通りであいつはキリスト……ヒンドゥー……ゾロアスターだったか?まぁ色々やってる。

この他にも複数の宗教を経験してきた、又の名をパーフェクトシスター。

今は何の宗教をしているのかは知らないが。

「……てぇめぇら」

「はいストップ。暴力はいけないよ」

「それな。……おとなしくして。人生のトーシロ　」

「んだとゴラァ!!」

殴りかかった不良二人をハンサムと不思議チビッ子がいなす。

ハンサムは迫る拳を受け流して不良の足を蹴る。それだけで不良は空中を『回った』。宙返りである。

廊下にガツンッ!と打ち付けた顔面を両手で押さえる。

チビは……催眠術？ポケ〇ンでそんなやついたな。キグルミまで着てその気満々じゃねぇか。怒こられたらどうすんだよ。

……そして催眠にかかるんじゃねぇ。不良なら耐えろよバカ。根性ねぇのおめぇらのほうじゃね？

「男のなんに薙刀に入ってるカマトトやろうが……」

「弱いよりかはましでしょ？」

三人……めんどくさいから、不良に言い返したハンサムが瓜生忠彦（うりゅうただひこ）。催眠のチビは安藝椥（あきなぎ）。

ハンサムは女子から人気あって、振り向かれ様に笑顔でフフッなんてすれば女子が湧く。男唯一の薙刀部所属ということもありやっぱり女子が湧く。

女子ってわかんねぇ。

チビは隠れファンが多い。あとは……住所不特定だったか。

それもあいつ家がないらしい。だからシスターの家に居候させてもらってるみたいだ。

毎晩シスターがやるミサで頭がおかしくなりそうという本人談もある。

んで、最後の一人だが……今は宇宙にいるんだっけか。今日帰ってくるらしいけど。

同級生で宇宙行ってるやつなんてこいつぐらいしかいない。

柳咲李奈（りゅうざきりな）。大金持ちの家の娘だ。ほんわかしてる雰囲気から繰り出す鳩尾へのグーパンは、強烈な絶望を感じるという。

あいつは宇宙生活体験という金持ちしかいけない企画に参加して今宇宙にいる。

『溶けないアイスって結構硬いね（*´∀｀）』

これ昨日のメールの文章。

はっきり言ってどうでもいいわ。

そんなこんなで全授業終了。授業中にカオスなことが起きるもんだ。

さっさと身支度して帰ることにする。

五人（あいつら）に絡まれるのはごめんだ。

「よう！松谷！調子はどうだ！」

……フラグか。言ったそばからだな。

「うん。気にかけてくれてありがとね。でも大丈夫だよ」

営業スマイルならタダだ。存分にくれてやるからはよ離れろ。

「そうかそうか！松谷は元気なのが一番だからな！」

「ハハハッ……」

はよ離れろエセ筋肉〇ン。本家に土下座して謝れ。

「……大丈夫ですか？私にお手伝いできることならなんでもおっしゃってください。宗教参入も歓迎しますから」

集まってきたじゃねぇか。

1人いるともう1人セットでついてくるマクド〇ルド方式なてめぇらが大っ嫌いだ。

「はい。ありがとうございます」

「松谷君？後から駅前で会わないか？美味しいケーキ屋さんを見つけたんだよ」

なんで俺をそんな分かりやすくナンパするんだ。お前そっちの気があんのか？引くぞ？

「お誘いありがとうございます。でも予定あるので……」

「……」

……今度はなんだアサシン・チビ。

「……なんですか？」

「……フグ食べる？内蔵しかないけど」

「いやぁ……気持ちだけで嬉しいよ」

毒殺か。はっきりと殺しにかかってくるお前が清々しくてうざってぇぞ。

……でも俺には効かねぇだろうな。

ピコン

メールか。ケータイを開き、着信ボックスを確認する。

『たこ焼き美味しいよ（ノ゛∀゛＊）』

削除。なんで連絡先しってんだよ。

上から順にマックス、シスター、ハンサム、チビ、ボンボン女。

この四連撃を避ければ、教室の出口はすぐそこである。

というかお前ら俺じゃなくて崎川にその優しさ向けろよ。ちらっと見たけど、慰めてくれないかな～チラッチラッ……みたいな目してたぞ。

……帰ろ。

？

2

冬の寒さに耐えながらオレンジに染まる町中を歩く。
ビルが建ち並ぶ金沢の大通りからこちらを覗くようにある太陽はとても優しく、美しく、温かい。
わざわざこの景色が見たくて帰り道の反対方向にある金沢へ来ている。
これに雪でも降れば幻想的な世界が完成するというのに。
人工物と自然が不思議と混じり合わさった景観が物語るのは、この先の人類の未来だったりするのだろうか。
鉄塔の建ち並ぶ夕げの景色。俺には終わりのように感じる。
ともかく、この景色を見れただけで満足だ。さっさと家へ帰ろう。
帰路に着こうとしたその時。

「……へぇ」

小さな気配が俺の意識をそれへと向けた。

「この都市にも出るようになったんだ」

ビルとビルの隙間の空間。宙に浮く丸い黒点。近くで見ればこれが穴だということが分かる。

しかし普通の人間は近寄っちゃいけない。

中にいる奴に連れていかれるからだ。

「パパ……パパ……」

その穴から這うように出てきた子供。立ち上がりながら、おそらく父の呼称を呟いている。

こいつらは力が半端ない。近寄ったら最後、１０ｔトラックでさえも持ち上げる力で穴へと引きずり込む。

俺は辺りを見回し、行き交う人々を見た。

……問題ない。一瞬で殺る。
鞄を路地の壁に投げ捨て、子供に向かって歩き出す。
この子供を殺すことがバレたら俺はこの世界で生きていけなくなるだろう。
『ノイズがかった真っ黒』の子供が人間に分類されるのであればの話だが。

「……『開門』『自在の去腕』」

口ずさむは変化の合図。俺の右腕が白くなり、氷のように透き通っていく。
手首には白い輪が生まれ、手のひらには赤い目が開く。
とてもじゃないが人間ではない。
……それもそうだ。
俺はホムンクルス。造られた人間もどき。
その役目はこいつらから人間を守ること。
都市に残された残留思念……『バグ』から守るために。

「パパ……？」
「残念ながら俺はパパじゃない」

「……パパ……」

うつむく子供。人間らしさが残るこれは、人間らしくてもバグなのには変わらない。こいつはいくら幼くともいつかは人間を襲うかもしれない『物』。

消えてもらうしかない。

俺は右手を振りかぶる。腕はそれだけでごく自然なことのように姿を変える。あらゆるバグを引き裂いてきた、化け物の爪へと。

「……パパ」

「じゃあな」

？振った腕は唸りをあげ、子供の体を通過する。黒いノイズが辺りに散らばる。さながら血だ。

残るのはズタズタに裂かれた真っ黒い何か。それもじき跡形もなく消え去るだろう。

その証拠にノイズが空中にとけだしていた。

バグが死に黒い穴も消えていく。放置しておけば人類を滅ぼすかもしれない災害でも、そうなる前に消せば防げる。

ホムンクルスが人間を助ける義理はないが、親が人間だから仕方がない。

その場を後にしようと、鞄を拾い上げた。

ふと目に入る刺繍された名前。

『松谷陽太?』

俺の名前。太陽を反対にしただけの安直な名前。

でも嫌いじゃない。

今度こそ路地を後にする。

空は夜と夕の境目であるかのようにグラデーションで色付けされていた。

?

「今日は良い夢が見れそうだ……」

……人間が産み出したバグが、人間の首を絞める。毎度バグを殺す度に思う。自業自得だなと。

その人間に造られた俺が言える立場じゃないのは分かってるけども。
それでも人間って愚かだと思う。
？　伽藍の俺には分かろうとしても分からない。人間の考えなんて。

「それでも、人間を助けないといけないんだな」

俺が生まれた理由は人間を守ること。それだけだ。バグや穴に対する技術が生まれたら俺を含むホムンクルスは用済み。
開発者の人間に心配されたことがあるが、別に悲しいとは思わない。
それが当然で自然な摂理であることはわかっているから。
そもそもホムンクルスもバグも穴も、生まれてくることがなかったであろう物だ。
こうして生きてるだけありがたいもの。
けど、人間から見てホムンクルスもバグとかと一緒で……『物』なのには変わらないんだなぁ。

「……犬だって法律上じゃ物なんだ。生きてる生命体が物と認識されたっておかしくないんだ」

歩く速度が速くなっていく。過ぎ去っていく人々の間を縫うように早歩きで歩く。
鼓動が早くなり、目が潤って視界がぼやける。

……これが悲しみなんだろうな。

悲しみの気持ち。ズキズキと心が痛い。目から涙がこぼれ落ちる。顔も泣き顔に変わっていく。

……俺は……どうしたいんだ？
悲しんで何をどうしたい？

誰も教えてくれない。
俺がホムンクルスなんて、ここにいる人間の誰が知ってるんだ。
俺の気持ちなんて分かるはずがない。

1人で螺旋の底へと沈む感覚。

それはとても恐ろしい。

「……考えるだけ無駄だ」

思考を頭から追い出し、暴れる悲しみを押さえつけ帰路についた。

？

3

世界中に現れる黒い穴。そしてバグ。
今のこの時にも世界のどこかで生まれている。
それらの駆除をするべく、親は俺のようなホムンクルスを大量に造った。
そのおかげで地球が滅ぶのは免れている。
……バグを産み出したのも人間だから釈然としないけど、ホムンクルスの存在価値はバグを殺すこと。それ以外にない。
そんな感じで、限りなく人間に近いように造られたホムンクルス達は様々な検査に引っ掛かることなく世界中で暗躍している。
そのなかで未成年として設定された俺は、学校へいくことを余儀なくされた。
日本の法律は厳しい。
そんな日本の法律でも、ホムンクルスであり『生体兵器』でもある俺を押さえつける

ことはできない。バレることがないからだ。
見つからなければなんでもして言いわけじゃないが、人間を救うための兵器なら文句はないだろう。
そんなことはさておき。
何故普通の人間のこいつらに俺が逃げ切れないのかを親に聞きたい。

「がははは っ！松谷！俺たちから逃げ切れると思っていたのか？甘いぞ松谷！その甘さを叩き直してやるぞ松谷！」
「名字連呼しすぎです。俺そんなにいません」

暑苦しいぞコラ。肩に担ぐんじゃねぇ。筋肉裂くぞ。

「そんなに急がなくとも神はどこへも行きませんよ？あ、こちら浄土真宗への加入パンフレットです」
「大丈夫です。というか仏教もしてらしたんですね」

パーフェクトシスターの名は伊達じゃないってところか。退魔術覚えてきたら厄介

なことになりそうだな。
女連れてきたハンサムは却下で。

「何故だぁ!?」
「てめぇに聞けバカ」

俺が何故こいつにだけ冷たいか。
その理由は単純。モテるからである。
次に出てきたのはチビ。窓からライドオンするとはなんともアクロバティックなチビである。
腰からはずしたふろしきを無表情で渡してくる。

「これ……」
「……これは?」
「トリカブト」

こいつは俺に恨みでもあるのだろうか?

ほどいたふろしきの中身は明らかに致死量を越えた『トリカブト混ぜお握り』が入っていた。

？　そして申し訳程度の漬物。

「この漬物は？」

「青酸カリを注入したたくあん。時間がたつと消えるから早く食べて」

「すいません。昼には重すぎます」

「重いの?!食えないじゃなくて?!」

黙れハンサム。そして失せろハンサム。

「ねぇ松谷君～。お昼一緒に食べよ～？」

話しかけてきたのは金持ち女。

宇宙から帰って来て1日しか経ってないのに学校これる筋力が、その細足にあるとは思えない。

こいつホムンクルスだったりするのか？

宇宙空間での実験は完了してないはずだから違うはずだ。

「すいません。また今度で良いですか？」

この間受けた鳩尾へのグーパンがトラウマになった今、こいつとは一時の時間も共にしたくない。ホムンクルスにある種の恐怖を植え付けるようなグーパンを持つ女。

こいつにホムンクルスの道理は効かないのか？

だとしたらこいつらは俺を越えるほどの超人であることには間違いないだろう。

どっちにしろあまり関わらない方がいい。

人間と親しくなるために存在している訳じゃないからな。

「そんなつれないこと言わないでよ～」

そう言って後ろから抱きついてくる女。

背中に当たる2つの肉の感触。そして広がる花の香り。もがくともっと強く抱き締めてくる。

こいつもこいつでうざってぇな……。

「……ちっ」
「笑顔で舌打ちする人初めて見た」
「怒ってるの？でもそんな松谷君もいいね～」

あぁ……めんどくせぇ……。今日もさっさと帰るに限るな。

授業が終わり、鐘が下校を知らせる。今日はあの景色を見ることは叶わないだろう。なぜなら今日は身体検査の日だからだ。それもホムンクルス専用の。
ホムンクルスは通常の人間とは比べ物にならないくらい強化された人間もどき。ちょっとした怪我なら数秒で治る。
もし手足がもげたとしても再生可能だし、首が飛んでもくっ付ければ死なない。普通の日常を送る中で死ぬことはないだろう。
これだとホムンクルスは不死のように感じてもおかしくない。俺を造った研究者も最初はそう思ってたらしい。
しかしホムンクルスは物理的に頑丈なだけであって死ぬときは死ぬ。
一番多い死因はやっぱりバグによる『消失死』。バグが出てくるあの穴に引きずり込

まれると、そいつの情報が全世界から消え去る。
こうして知らないホムンクルスの名前が見つかったときは『消失死』として処理する。
名前は消失死による抹消で消え去れないように、特殊なコーティングがされている。
その紙のお陰で
どんなに死にづらい体を持っていても、この世界のどこかに『居た』ことを消されてしまったらどうしようもない。
もちろんこれは普通の人間にも関係する。穴に引きずり込まれたら存在は消える。
ごくたまにそれに気づく人間もいるようだが、どうしようも出来ず、そのまま世界に順応していき忘れてしまう。
そうして消えたやつらの末路は『バグ』となり、その近辺ではあるが別の場所に出現するという。これに関しては本当かどうか調査中だ。
帰り支度を済ませ教室を出ようとするとチビが立ちはだかった。

「……まて勇者よ」
「突っ込みませんからね安藝さん」
「それは悲しい」

……俯いてないで用件を言えや。

「何かようですか？」

「……これあげる」

そう言って差し出されたのは白い石だった。ただの白い石に見える。

「家の庭にある白石。災いから守ってくれるって」

ただの石だろそれ。目をそらしても無駄だ。

「なんでこの石くれたんですか？」

「女のカン」

「……」

意味が分からなさすぎてため息が出そうになる。が、グッとこらえる。

仕方なしに石を受けとるとチビは微笑む。その瞬間俺は固まってしまった。

そして何を思ったのか窓から飛び降りた。

「おいっ！」

ここは四階。普通の人間が飛び降りれば怪我は免れない……はずなんだ。

「……誰もいない」

慌てて下を見たが、誰もいなかった。痛みで蹲ってるチビとか想像してた。
あいつ何もんなんだ……？
それについては調査するとして。

「……笑った？」

無表情なチビでも笑うんだな。見たことなかったから新鮮だった。
なんだか珍しいものが見れたような気がする。

?

4

眩しさに目を開ける。

太陽の光が目に飛び込んでくるのを手で防ぐ。

そこに広がるのは空を写す、透き通った水面。

風もないのか荒波ひとつたてない。

どこを見渡しても水面が広がっている。

これじゃ地平線の向こうにも繋がっていそうだ。

『助けて』

その一声が耳に届いたとき、俺は無意識に後ろへ振り返る。

黒い人型の体に目と歯が無数についた化け物。

そいつが濁流のように流れるバグを率いて、1人逃げる空色の髪の少女を追っている。

伸びる黒い手が少女の腕を掴む。そこから血が溢れだし、

やめろ…

バグに引きちぎられた。

やめろ……

少女の右足が切り落とされる。

やめろ……

少女の左足が少女の右腕が少女の横腹が少女の胸が少女の右太股が少女の右肩が少女の鼻が少女の耳が少女の右肩が少女の左太股が少女の顔が

やめてくれっ……！

喰われているなかで少女の目が俺を見る。

恨むがこもった視線が、俺をその場に使って縫いつける。

ごめんなさいっ……ごめんなさいっ……！

渦潮にのまれていくかのように少女が消えていくなかで、俺を睨みつけたままその口がゆっくりと動く。

『許さない』

……ぁ……ぁぁぁぁ……

「うわぁぁぁぁぁ!!!!」
「落ち着け松谷!」

死んだ死んだ死んだ死んだ死ん

「落ち着けって!……あぁもう!鎮静剤持ってこい!!」

俺のせいで俺のせいで俺のせいで俺の俺の俺の俺の俺の俺の俺の

……俺のせいで……死んだ。

「はよ刺せ！暴走するぞ!!」
「鎮静剤注入完了しました！」

……俺のせいで……。

……。

俺は一体……。

「やっと正気を取り戻したか。このバカ息子が」
「……お袋？……あぁ……」

検査に来てたんだ。俺。
で、たぶんやらかしたな。

「やっちゃったのか……」
「やっちゃってくれたね。次暴走しかけたら殺すからね」
「暴走は止めらんないっての……」

毎度毎度嫌になる、あんな夢ばかり見るのは。
ホムンクルスは人間を改造して造られた、限りなく人間に近い生物。
改造された人間の自我は全て消えるのだが……稀に記憶の断片が残っていることがある。俺のように。
それが本当にあった記憶なのか、ただの想像なのかは分からない。それを知る人間が既にいないからだ。
その記憶の殆どが『トラウマになりそうなもの』ばかり。しかもちゃんとした映像で流れるのだからたまったもんじゃない。
悲しみ１００％の絶望する映像を見せつけられたホムンクルスは、自身を守るために自我を封じ込め暴走する。俺が暴走した理由はこれだ。
幸いこの現象が起きるのは検査の時のみ。俺が思うに、記憶をレポートとして提出することが問題なんじゃないかと思う。
頭の中の棚をひっくり返せば、そりゃ遥か昔の記憶だって出てくる。

こんな夢を見るから検査は嫌いなんだ。

「まぁ、昔に何かあった人間をベースにしたことは私の責任か」
「責任なんて感じてねぇくせに良く言うわ」
「学校で良い子ちゃんぶってる奴に言われたくないね」
「人間関係は大事だってお袋が言うから仕方なしにやってんだろが」
「だから？良い子ぶる必要なんて一ミリもないじゃない。あんた地味に好かれようとしてんじゃないのぉ？」
「あぁ？」
「殺るかい？あんたが勝つ見込みなんてゼロだけど」

いつか殺したい相手。それがお袋だ。
他の研究者は怯えまくってるが、これ俺とお袋との挨拶がわりみたいなもんだ。
あまり気にして欲しくない。そんなこと言われても無理があるか。

「……あ、検査終わったから勝手に帰って良いわ。暴走以外に異常なし。これからも任務を全うしていくように」

「わかったよ……『開門』『自在の去腕』」

右腕が白く、透明に変わっていく。手首に白い輪。手のひらの中心には赤い目。

この腕の特徴としては、ある程度ならなんでも出来る汎用性。

大きくしたり、剣や槍のように形を変えたり、光線も撃てる。その光線のエネルギーを使って空も飛べる。

多彩ではあるけども最強じゃない。

他のホムンクルスはその再生力を生かして剣を極めたやつや、エネルギーを加工して様々な遠距離攻撃を産み出したやつなど『1つを極めること』が最強なんだと思う。

俺は器用貧乏なだけだ。そこにセンスや経験なんて欠片もない。

腕を使い宙に浮く。研究者に礼を言って窓を開ける。ここから家まではそこまで遠くない。

多少疲れるけど……飛んで帰ることにしよう。

今日はゆっくり寝たい……。

？

5

？

翌日。検査が終わった翌日は高確率で怠さが襲う。そこまでひどくないが、数時間はベットに縛り付けられた。

……怠さを思い出すとまた怠くなってくる気がする。もう考えないでおこう。

今はリビングでフルーツグラノーラを口に頬張り、朝のニュースを右から左へ流すように見ている。

この朝のゆったりとした感じが、1日のなかで最も癒される一時だ。これがずっと続けば良いのになと思う。

朝食を食べ終え、リビングのカーテンを開ける

「良い天気だな」

ニュースでも言ってたけど、今日は稀に見る快晴の日らしい。雪も雨も１０％以下の日だ。
予報が正しければこの状態があと一週間続くという。
それも石川だけ。
……あー……うん。

「異常なしだな」
「んなわけあるかバカ息子」

お袋がぶち開けるかのごとく勢いでリビングの扉を開けて入ってきた。
……その入りかた、ドアの留め具が壊れていくので止めてほしい。てか止めろ。
俺の他にも１００体近くのホムンクルスがいるなかで、なんで俺んちばっか来んだろな。今月で１５回目だぞ。
この間、久し振りに会ったホムンクルスの友達にその事言ったら『なにそれ羨ましい』とか言われて殴りかかってきた。
……こんなマッドサイエンティストの親のどこが良いんだ。

「うわ……居たのかよ」
「なによその反応。人を厄病神みたいに」
「だって厄病神じゃん」
「言うようになったじゃない……」
お袋の額に青筋が入る。顔も笑顔だが目と鼻の辺りが暗くなっていってる気がする。
だってお袋が来る度に部屋が散らかるから嫌なんだよ。何をどうしたら食器棚と冷蔵庫がひっくり返えるんだ……。
異常な出費だったのに賠償金もねぇのは訴えても良いと思う。
「……なんでいんだよ」
「そりゃもちろん『バグ討伐の命』を言い渡すために決まってるじゃない」
バグ討伐の命。
通常のバグよりも強い個体が生まれた時にお袋から命ぜられる指令。
ファンタジー小説でいえば、魔物の大群が来てるからギルドからの依頼で行かなきゃならねぇ……みたいな感じ

つまり結構ヤバめなわけだ。
……でもやらない。
お袋の割った皿の恨み……忘れたわけじゃないんだからな。

「なによその目は」
「別に……それで、いつ？」
「今日」
「予定あるから無理」
「あんたの部屋の予定帳見たわ。予定なんてゼロじゃない」

……ちっ。
規則なんて大っ嫌いだ。

「あんた、私に似てがさつだけど規則は守る質だもんね。私はそれが嬉しいよ」
「うっせ」

ホムンクルスの規則。月1の検査でやる記憶レポート提出の際に、それを裏付けるも

のが必要である。それが予定帳だ。
これを書かないと記憶の確証が取れない。規則破りとして処分される。
しかし……お袋に褒められると……なんか歯痒い。

「……」
「なにあんた顔赤くして……結構可愛いとこあるじゃない」
「ちっ……！」

俺をにやけながら見るお袋をぶん殴ってやりたかった。

「あ」

お袋は何か思い出したようで、唐突に持ってきた荷物を漁り始める。
……あーあー……もう散らかってるし。
一昨年の旅行写真か？なんでまだバックの中に入ってんだよ。
今度は……水着か？片付けろよ。
ドライヤーにコテに何時のか分からないお菓子にエトセトラエトセトラ。

片付けれない親って嫌だなぁ……。

……てか、ブラジャーやらパンツやらまで出てきたぞ。それに着替え、歯ブラシまで持ってきてやがった。

……俺んちに泊まる気なのか。お袋よ。

「泊まるなら一泊１０万な」

「あんたの家に泊まるのにそんな価値はないでしょ」

「あそ。なら外で」

「馬鹿野郎！この時期外で寝てみなさいよ、絶対死ぬわ！」？

「死んだらお袋の人生はそれまでだったってことだ」

「なにこの子……ドライすぎ……」

……バッグ漁りながらコント始める辺り焦ってねぇな。何か考えでもあるのか？

「……なに探してんの。そこまで大きくないキャリーに何をてこづって……」

「あった！」

あったんかい。

……うわ。お袋を中心として約半径5メートルの範囲が荷物のやまになってる……。

「これ、なにか分かる？」

「……なん……だと……」

お袋の手に握られていたのはお袋のせいで壊れたはずの皿だった。

しかも一番のお気に入りの皿である。

「任務を遂行してくれた暁には」

「やっぱやる」

「よろしい」

……目の前のニヤニヤしてるお袋は、俺のことを単純だと思っているかも知れない。

だからどうした。皿が手にはいるのだ。単純だろうとなんだろうと構わない。

その皿が手にはいるならば。

俺はバグの場所を聞き、玄関を飛び出した。

?

6

向かった先は金沢のとなりにできた街、漆山。
金沢のとなりにあるため人の行き交いが激しく、鉄塔のようなビル群が建ち並ぶ。
土地の値も安いと噂で住宅街とオフィス街、金沢に続く表通りに商店街など、金沢のドーナツ化現象が加速している。
……あ。

「そこのお姉さん、コロッケ1つ」
「最近の高校生は口も軽くなったもんだね……150円だよ」
「どうぞ」
「あいよ。毎度どうも」

ここは最近見つけた美味しいコロッケ屋さんだ。漆山に来たら絶対と言って良いほど通っている。おすすめは普通のコロッケ。飽きたらメンチカツ。どれもこれも美味しいから、しばらくは飽きはこないだろう。

店番してるおばちゃんが可愛らしいので、少しでも長生きしてもらおうと『お姉さん』と呼んでいるのだ。

田舎のおばちゃん嘗めたらあかんぞ？怒っとヤベェことになるかんね。

誰がどう見ても寄り道してるけど穴は逃げないから大丈夫。

でも中から出てきたバグは……はぁ……。

「やっぱ急ぐか」

コロッケを頬張りながら人混みのなかをあるいていく。

歩きながら食べるのは行儀悪いけど仕方ない。なにか起こったあとじゃ遅いし。

人通りが多い表通りにはバグは発生しにくい。生き物としての気力が、バグの発生源となる穴を遠ざけるためだ。

結果として人気が少ない裏路地や、ビルの隙間に存在する隙間に穴が出来やすい。

今回指示された場所も裏路地。そこはホームレスの集団がいる場所らしい。ものごいをされるのは勘弁……だと思ったのだが。

「『集団失踪』か……」

２日前にうちの研究員が死亡者がいないか調査しに入ると、約２０名のホームレスが消えていたという。

バグに喰われたな……と俺は思った。

研究員が死体を探す理由？新たなホムンクルスを造るためである。

正規の死体を用意するのは金も時間も掛かるので、ホームレスの死体を回収しているのだ。

住民票はどうせ親が抹消してるだろ。

裏路地に近づくにつれ、俺の気配察知がバグの気配を感じ取り始めた。居るのは間違いないだろう。

そして……強力な気配も感じている。

喰ったホームレスを糧として、バグが強化されているからだ。
強力な個体は人間のような姿をしないことが多い。
本能のままに体を変化させるため、その環境に応じた姿に変形する。
この暗い裏路地に応じた姿……ここ結構湿気ってるし……ナメクジとか？蛙とか？

「蛙はいいけどナメクジは……」

塩とか持ってくるべきだった……。
でもバグに塩は効かないけどな。

「手で殺らんと駄目か……手を変えても感覚はそのままだから嫌だなぁ」

裏路地に気配を探って、徐々にバグとの距離を縮めていく。
バグについての定義を確認しておこう。
バグは人間を『穴』に入れることによって、生きる気力が全て抜けた、言わば『抜け殻』のようなもの。
その抜け殻には人間の感情は存在しない。

元は人間といえど、今は化け物である。殺さない義理は俺には無い。
穴のエネルギーで作られた『純粋なバグ』も存在しているようだが、今回は現れないだろうな。
今回は人間を『直接喰った』、強化版のバグだろうから。？
曲がり角を曲がる……のを留まる。気配がすぐそこにある。
角から見つからないように、ゆっくりと覗く。

「……見っけた」

ホームレスが居たところとは少し違う場所にいたが、正真正銘あのバグだろう。
蝸牛……カタツムリだ。おおよそ２０メートルの真っ黒な巨体を、腹足で引き摺るように歩いている。
その後にはネバネバとした透明の粘液が付着し、足場は悪そうだ。
体から突き出た２本の触覚。おそらく目だろう。最初は目から攻めるか？それとも殻か？
そして注目を引く禍々しい障気を放つ殻。たぶんあれは弱点。それと同時に、爆発寸前の爆弾。刺激したら爆発すると、頭が何故か認識している。

本能的な危機察知能力が警鐘をならす位ならば、相当ヤバいものだろう。
効果範囲がどのくらいかは分からないが、殻への攻撃は最終手段にしておく。

「殻以外の弱点……」

手を使って頭と体を両断を図る……いや、レーザーで撃ち抜くか？
もしあれが死んだときに、自動で殻が爆発されるように仕組まれているんだったら……ということも考えると、攻めようがなくなる。
どれだけの規模の爆発が起こるのか分からない状況で、リスクは背負えない。

キシャァァァァァ!!!

「もう少し考えさせてくれてもいいじゃん……『開門』『自在の去腕』」

口から吐き出された粘液を展開したシールドで防ぐ。
右手はホムンクルス特有のエネルギー、『エナジー』を自在に操ったり作ったり、体外へ出すこともできる。おかげでホムンクルス友達にサンドバッグにされるけどな。

今のところ、それによって怪我はしたこと無い。以外とシールドは強いのだ。
粘液は地面に当たるとジュワッと音をたてる。
その場所は爛れ、凹んでいた。即効性で殺傷能力もある。
右手以外で当たりたくないな。

「とりあえず目を……」

俺は走りだし、接近するなかで手をブレードに変形させる。蝸牛は予測して酸を放ち、その予測の裏をかかないとやられる。

「頭がいいのか……」

人間２０人以上喰ってるもんな。単純計算して２０人分の脳ミソがあるわけだから頭いいのは当然か。
こりゃ長引きそうだな……。

？

7

このカタツムリ……中々やりおるぞ。
接近してやっと目を切り落とせると思ったら目から酸を吹き出しやがった。あれはビビった。シールド出てなかったら死んでた。
それに動きは遅いだろうと践んでいたがそんなことはなかった。めちゃくちゃ速ぇ。
あの腹足で何をどうしたらそんなに動けんだ。ホバーでもついてんのか？

「ハァ……ハァ……ハァ……はぁ……ふぅ。……こんなの無理ゲーだ……」

影に隠れて相手の様子を見ているが、敵は油断も隙もない。
斬っても再生するし、一発でももらえば死に、殻も攻撃したけど傷ひとつつかなかった。心臓はどうせ殻のなかだろうから一撃で殺すことも不可能。

……これ詰んでるわ。

「皿とかどうでもよくなってきた……」

生きててなんぼの皿コレクションである。

たかが１００均の皿で自分の命を売った自分が恨めしい。

……いや。これは本気で不味いぞ。

「……近くに仲間はいないな……」

数人いたとしても勝てないだろう。アレはそういうバグだ。一人で倒せるバグじゃない。

ここは素直に撤退だ。

「デコイ設置して……よし」

手を使い、足にエナジーを集中させる。出力は全開。

あの瞬間移動じみた移動速度から逃げるには足が壊れる限界までエナジーの出力を上げないと逃げれない。
敵前逃亡は重罪だが、死ぬよりかはマシだ。

「……で、逃げてきたと?」
「……」
「ホムンクルスは死んでも相手を殺す兵器として生まれてきたもんなのよ?それを分かって逃げてきたの?」
「百も承知だ」

俺の答えに親はため息をつく。敵はまだ生きていてホムンクルスは逃げてきた。プラマイゼロだが、バグが強くなってるかもしれないのだ。
裏路地に迷い混んできた人間を食べて。
ため息をつきたくなるのも分かる。

「……でも負けて当然な敵だろうなって思ったから、別に怒ってないわ。あんたが喰われて余計にパワーアップする方がめんどくさいんだし」？

皮肉な話だが、ホムンクルスとバグは調和する。互いに混ぜても問題ない存在なのだ。

この時、バグがホムンクルスを取り込むと人間を喰った倍以上のエネルギーを得ることができる。

例えばあのカタツムリ。人間２０人でああなるのなら、ホムンクルス一体であのカタツムリができるのだ。

「私が出てもいいが……ここはあいつらの性能を試すか」

「……またろくでもねぇもの作ったのか？」

「あんたからしたら嬉しいかもね」

「？」

親はそう言うと、手元のコントローラのボタンを押した。

ヴゥゥゥゥン……。

テレビが壁に収納され、床かか大きなパネル……ってちょいちょいちょい！

「家になんて改造してんだコラァ！ローンもまだ払ってる途中なんだぞ?!」
「いいじゃない。こんな大きなパネルのテレビ欲しかったんでしょ？」
「お袋の研究所にいくらでもあるから飽きとるんじゃこっちは！」
「段々と石川弁に侵食されていってる子供を見て和んでる母なのでしたー」
「ほんまにどつくぞ!?」

ヴゥン……

突然パネルに映像が流れる。

「……はぁ?!」

？

お袋の研究所にあるホムンクルスのトレーニングルーム。普通なら何人か自身の強

化に勤めているが……

「……マックス、ハンサム、シスター、チビ、ボンボン女」

そこにいたのは?壁島を初めとするあの五人だった。?

8

？　なんであいつらが……
研究員になにやら説明を受けているようだけど……。

「お袋説明しろ！あいつらはただの一般人だろうが！なんで研究所に連れてきてんの?!ホムンクルスと人間の区別すらつかなくなったんか?!」

この研究所は医薬品研究所として書類上存在している。
一介の医薬品研究所が生体実験してるとバレようもんなら……最悪死刑か？懲役１０年２０年程度ではすまないだろう。
残ったホムンクルスは解剖やら科学実験に使われる『物』に成り下がる。絶対やだ。

「落ち着けワトソン君」

「言いわけねえだろ。説明しろ。今すぐにだ」
「あぁ、もう分かった。めんごめんご。これでいい？」
「誰がワトソンだ！」

お袋は渋々といった表情で話始めた。

「……穴の向こう側にある世界って知ってる？」
「……『穴の向こう側にある世界』？」

バグが出てくる穴のことだよな？その穴の向こうに世界があるだと？
……初めて聞いた。
……携帯からデータベースにアクセスして……でも載ってない。
「載ってないのは私が書くのを忘れてたからだ。許せ」
「……いいから話せよ」
「分かったからそう睨むな。
穴の向こう側にはこちらとは違う世界が存在していることが判明した。確率として

は8割。その証拠に穴から吐き出された何かの紋章……これだ」

パネル画面に画像が表示される。

……文字？ルーンに近いか？……魔術的なものだと？

「あんたも魔術的なものと考えてるかい？」

「……違うのか？」

「半分正解で半分不正解。……この答えも間違ってるかもしれないが」

「？」

「……魔術科学とでもいえばいいのか……その類いの技術が、石ころに記憶を紋様として付与したもの。私はこれを『ログ』と呼んでいる」

「『ログ』……」

何者かの記憶が、紋様として石ころに内蔵されている……。

「このログに内蔵している記憶を、人間……または他の生物にコピーさせれば、それだけで戦う力が手にはいる。そんな代物よ」

……まさかお袋っ！

「あいつらを戦わせるために研究所に呼んだのか?!」
「当たり前じゃない。ログの波長にあう人間を探したらあの子達だったんだもの。それに記憶の内容を見たけど、どれも戦闘用なんだもの。彼らは有能な兵士になってくれるわよ」

このクズがっ!!

「……ここまで腐ってるとは思ってなかった。……月音」
「あら。本名知ってたのね。というより、私だって驚いてるのよ?『自分の造った子供達』よりも『強い人間』が生まれるとは思ってなかったから」

……今なんつった?

「……ホムンクルスよりも強い?」

「そう、強いの。圧倒的に。私の子供達が霞んで見えるくらいに」

ハンマーで頭を横殴りされたようだった。
ついに来てしまったのだ。人間だけでバグを対処できる時が。
俺達の存在価値が、０になった……。

「……」
「お、落ち込まないでよ。最終的には処分されるけど、それはまだ少し伸ばせるし……」

『処分』
犬や猫を殺すのと同じ。
使われたあげくに死ぬ。守ってきたはずの人間に。
それはあまりにも非情で。残酷で。
泣くことすら出来ずに、俺だけ時間が止まったような感覚だった。

「そうね～……喰われたときのリスクはあるけど、使えるものを使わないのはおかしいじゃない？ほら、ゲームと一緒よ！弱い味方よりも強い味方の方がいいでしょ？これで

納得してくれる？」

……こいつには造った側としての気持ちというものはないのか？

そして、あいつらはお前と同じ人間なのに、あいつらを『物』扱いするのか。

……この外道が。

？「……」

「……怒っちゃうよねー……こりゃどうしたもんかなぁ……。あの子たちにお別れの挨拶でもやっとく？」

「黙ってろ」

「はいはい……あ。言っとくけど、行くってあの子たちがいったんだからね？誘ったのは私だけど強制して連れてきた訳じゃ」

「黙ってろったろゴミ」

「おおう。怖ぇ……」

？

……ここには居られない。あいつらのところへ行かないと。

「……あっ！逃げた！」

月音に構ってる暇はない。構う義理がない。

俺は手を使い、研究所へ急いだ。

「俺達にしか出来ないことだと？」

「そう。君達にしかできない。どうか、世界を救ってくれないか？」

目の前で頭を下げる研究所の偉い人。

俺達５人が世界を救う？そんなの冗談に決まってる……そう思っていたのは数分前まで。石ころを手にかざしたら、俺の手から光の剣が出るようになったんだ。信じない訳がない。

そして、バグとバグが生み出した『ホムンクルス』によって世界が危機に瀕している。

一人の人間として、やらない選択肢はない。

俺達は完全に信じた。俺達が『五英傑』の末裔だということに。

「やります。な？みんな」
「ですね。これも神の思し召しであり試練でしょうし」
「そうだなー。女の子にモテるならやってやるよ」
「……私も松谷君のことを守れるなら、それに越したことはない」
「あ！守るのはお金持ちである私ですよ！」
「金は関係ない。大切なのは気持ち」
「うぐっ……確かに」
「……けど、なにか嫌な感じ」

この力は気持ちの強さで強くなったり弱くなったりするらしい。
俺で言うと、光の力が大きくなって剣が強くなるような。
やっぱり気持ちってすごいんだな。

「ありがとう。本当にありがとう。君達の活躍を期待している」
「「「はい！」」」
「……」

俺達の戦いが始まると思うと……なんだかワクワクしてくる。
地球を救う。ヒーローみたいでカッコいい。
これからの日常がより楽しいものになるだろう。本当に楽しみだ。

バゴォォン!!

「このクズどもがぁぁあ!!」

着いた直後に壁をぶっ壊した。どこだ!あいつらは……っ!

「15号?!」
「……てめぇこいつらになに吹き込みやがった!!」
「松谷……君?」

目の一番に入ったのはチビ……安藝だった。

「安藝！無事か？何かされなかったか？」
「……不思議な何かをもらった」
「ちっ……遅かったか……！とりあえずここから逃げ」
？
「こいつだ……！こいつが人間を殺す怪物『ホムンクルス』だ！」
「……は？」

……目の前の研究員、なんつった？俺が人間を殺す……怪物？
……ホムンクルスも敵だって教えたのか？！

「お前っ！今まで人間を守ってきたのは誰だと」
「松谷……お前、ホムンクルスなのか？」
「っ？！」

問いかけたのは壁島だった。信じてるのか？こいつらの言葉を……っ！
なんの知識もないことを良いことにこいつらに騙されてるってのかよ！！

「壁島、確かに俺はホムンクルスだ。今まで黙っていたのは謝る。けど騙されるな。ホムンクルスは決して人を」
「『襲う』……だよな？」
「違う!!俺達は人を襲わない!!逆に人を守って」
「松谷さん……」
「っ……」

……なに慈悲深い目で見てるんだよ、清子。その目は俺に向けるものじゃないことぐらい分かってるだろうが……。

「神は……時に残酷ですね。しかし、それが核心へと迫る導きなのかもしれません」
「お前も……」

ハンサムは俺を睨み付け、ボンボン女は口元を両手で押さえている。信じきれてないようだ。

「なぁ……信じてく」

「殺せる」
「……は？」
「松谷君が敵なのだとしたら……殺したら遺体をずっと私のものにできるじゃない！何て素晴らしいんでしょう！」

……もうダメだ。ここにいたら死ぬ。殺される。強化されたバグよりも強いヤツが5人が相手なんて、戦ったら死だ。
逃げよう……どこか遠くへ……っ！

「私も連れてって……」
「……へ？」

逃げようとした俺の手を掴み、そう言った少女がいた。

「安藝……？」

？

9

「安藝……？」
「……私も連れてって」
「安藝ちゃん?!」

安藝が俺の袖を掴んでそう言った。こいつは……違うのか？

「あのホムンクルス、安藝君に催眠をかけてるぞ！
「なにっ?!」
「嘘もほどほどにしろよクソが……！」

あの研究員はなにがなんでもホムンクルスを敵にしたいらしい。どうせ、お袋からの

命令だろうな。

……俺達は自分の子供達じゃなかったのかよ……。

「君達、その力をつかって、あのホムンクルスの手から安藝君を救うんだ！」

「了解！」

ちっ！

「安藝！行くぞ!!」

「うんっ……！」

俺は安藝を背負い、手の出力を極限まで上げる。

「捕まってろよっ！」

貯めたエナジーを爆発させ、その勢いで弾け飛ぶように空を飛んだ。エナジーはそのまま放出したまま、オレンジが失せてきた夕空を飛んでいく。

「す……すごぉい……」

「一生に一度の景色かも知れねぇから目に焼き付けとけよっ！」

後ろを一瞬だけ見る。……ついてきてないな

ギュンッ!!

白い光が真横を横切った。スナイパーライフル並みに速いぞあれ。

当たったら死ぬ。直感がそう告げた。

「遠距離武器もってんのか……」

シールドでもギリギリ耐えれるか?……無理か。

「振り切る……っ！」

左斜めに方向を変える。その直後に光が飛んでくる。
左へ右、右へ左、上下に揺さぶり、旋回して避ける。
……しばらくして、光の弾幕が飛んでこなくなった。今回は諦めてくれたっぽい。少し安堵した。

「……どこにいこう」

俺にはもう帰る場所がない。宛になる人間なんていない。安藝もホームレスだから、住む場所も家族だって居ないのだ。

「……松谷君の家は？」
「駄目だ。お袋がいる」
「……お母様？」
「俺みたいなホムンクルスを造ったマッドサイエンティスト。それがお袋だ。あの研究所の最高責任者でもある」
「……一番偉い人ってあの教官みたいな人じゃないの？」
「ありゃただの研究員だ」

？またはクズ。

「……風と雪を凌げる小屋でもあればいいんだけど……」

「……一つも見つからない」

空いた小屋なんて、この漆山じゃ存在しないも当然だ。あまりにも土地が安いから、みんなこぞって買うのである。

「漆山から逃げるとも考えたが……これみてみ」

「……回線が切れてる……」

漆山は『次世代都市』としてとてつもない近代化が進んでいる。例として挙がるのは『空間拡張装置』。

次元を歪ませる機械を使って、無理やり空間を広げている。じゃないと都市人口１００万人が収まりきらない。

その空間を越えるためには専用の電子パスポートがいる。これは漆山に住む人達に

配布されるものだ。俺も持っている。
問題なのは、お袋によって使えなくなっていること。回線が切断されていたのだ。
ネットワークを遮断された電子パスポートはただの板に過ぎない。スマホと同じようなものだ。

「……じゃあ松谷君は？」
「この空間に穴を開けるしかない。……でもそんなことしたら本物の人殺しになる」

広げた空間は、例えるならゴムのようなもの。この漆山の約８０％が伸ばした空間の中で成り立っている。
俺が考えたのは、ほんの数秒だけ空間に穴を開けること。その数秒があれば、俺は外に出ることができる。

「……空間圧縮……」

俺が穴を開ければ、安藝の言う『空間圧縮』が発生する。
外の圧力を半ば無視して広げているこの空間は、傷がつくと一瞬にして不安定にな

る。

広げられていた空間が外の圧力に耐えれなくなり圧縮する。

それは、伸ばしたゴムを放すようなこと。

？金沢と同じくらいの土地面積を持つ都市が、どこにでもある石ころ位の大きさになるのだ。

「……俺はバグは殺すけど人間は殺したくない。だから、これは最終手段だ」

「でもそれじゃ……」

「まだ他に何かあるはずだ。考えれば何か……」

……まぁ……。

「今日は寝床を探そう」

「……うん」

裏路地に逃げ込めば、およそ人間の手は届かない。漆山はいくらでも裏路地が存在する都市だ。バグにさえ注意すればどうにでもなる。

……バグ殺しがバグに救われるか……なんともおかしなことである。？